

モバイルとパラボラの旅

清澤 暁子(あいちトリエンナーレ2016 コーディネーター)

國府さんと一緒に仕事をする機会を得たのは、2013年の夏である。当時私は『あいちトリエンナーレ2013』実行委員会事務局に勤め、國府さんはその国際美術展の出品作家だった。本展に加えて、トリエンナーレ会期中に私が担当した企画『モバイル・トリエンナーレ』にも出品して頂いた。

あいちトリエンナーレに、より地域的な広がりをもたせようと企画されたモバイル・トリエンナーレは、名古屋市、岡崎市以外の愛知県内4カ所―豊橋市・知多市・春日井市・東栄町―を巡るかたちで展開した。「モバイル」という言葉どおり、国際美術展に参加する17名のアーティストによる本展とはまた別の作品を携えて、町を移動しながら、そこに住む人たちに向けて週末にだけ開催された展覧会である。

國府さんは、ここに《Mobile Garden》(2013)を出品してくれた。前述のコンセプトを受けて、作品が展覧会と一緒に移動していくというアイデアから生まれたものだった。白く華奢な鉄塔の上にパラボラアンテナが上向きに付き、その円盤を受け皿に苔が敷かれ、ゆるやかに盛り上がった中央部分からは小さな木が生えている。高さは大人の胸ほど。そして、この小さな大地の塔を背負うのは、同じように小さくて白い三輪車だ。実際に乗ることもできる。最初の会場で展示した時、それは目に新しいかたちであるにも拘らず、三輪車をこぎながら、この小さな庭とともに移動していく子供の姿が、親しいイメージとしてありありと目に浮かんだのを覚えている。

私にとっての國府さんの作品の一番の魅力は、こうした想起力にある。意味や意図などの言葉に触れるよりも先に、すでに見る人の心の中で作品は自在に動きだし、物語の一ページが展開していく。國府さんが描く作品のイメージドロ잉には、頻繁に人が登場する。つまり、作品はそれ単体で存在するのではなく、人の営みがある世界の中に存在しているものなのだ。このイメージが無理なくかたちに落とし込まれるとき、作品は想起力を帯びるのだろう。

近年の國府さんは、人間の文明と自然の抜き差しならない関係を示唆するような作品を発表、スケールも大きさを増していた。他方、《Mobile Garden》のような愛らしい作品は、そんな問題意識とリンクしながらも別の一面を見せている。《Mobile Garden》で小さな庭に見立てられた自然と、子供＝人間。人間は一人で歩いていくこともできるが、その時自然は勝手には付いて来ない。少し重くても三輪車をこぐことで、自然と一緒に進むことができる。この時、三輪車は、

自然と人間を結びつけ並走させるための乗り物＝技術の比喩ともなっている。こうした構図を、三輪車という子供のための乗り物に託したところに、國府さんの未来へのメッセージを読み取ることもできるだろう。一見ナイーブに映るかもしれないこうした理想的な世界観こそ、國府さんの仕事に通底するものであり、重いテーマを扱う作品でありながらも、いつもそこに一筋の光が差しているかのように感じさせてくれるのだと思う。

國府さんに、パラボラアンテナを作品に使う意図を尋ねたことがあった。もともと、宇宙からの電波を受け止めやすいよう設計された形で、もっとさまざまなもの、人々の思いも含めて受け止めるお皿のようなイメージと話してくれたのを覚えている。土が盛られたアンテナは、水と光を受けながら緑を育む、いのちのうつわとなる。何より、作品自体が國府さんの思い、発想の受け皿としての作品であった。そして今、國府さんが残してくれたうつわに、何が育まれていくのかを見守ることは、私たちに託されている。短い期間だったが、私は《Mobile Garden》と一緒に旅をすることができた。國府さんの作品がこれからも、さまざまな思いを受け止めながら育っていく旅が続けられるよう、心から願い応援する。